

研究課題	3 九州地方で発生する大雨に対する地球温暖化の影響評価研究
研究期間	令和8年度～令和9年度（2年計画第1年度）
実施官署	福岡管区気象台
担当者	（福岡管区気象台）清家裕喜
担当研究官	〔応用気象研究部〕○川瀬宏明、野坂真也、福井真
目的	九州の大雨について、近年の大雨事例の分析、過去の長期的な変化及び最新の将来気候変動予測情報等を分析し、九州地方で発生する大雨に対する地球温暖化の影響を総合的に評価する。本結果は気象庁が進める近未来予測情報計画への貢献が期待される。
研究の概要	九州地方では毎年のように大雨が発生し、河川の氾濫や土砂災害なども多発。令和2年7月豪雨や令和5年7月の九州北部の大雨、令和7年8月の熊本での大雨に対しては、イベント・アトリビューション（EA）によって、地球温暖化による降水量の増加が指摘されている（気象庁異常気象分析検討会等）。一方、日本の気候変動2025では、2度あるいは4度昇温時に極端降水さらなる増加が予測されている。 現在、気象研究所では気候変動予測先端研究プログラム（以後、先端プログラム）と協力し、新しい時間連続将来予測計算を実施している。気候変動予測計算やEAの結果を地方気象台職員と共有し、現場での大雨の知見を組み入れる形で、地球温暖化が進行する将来の大雨の評価に対して活かすことは、地域防災の観点からも重要である。
令和8年度実施計画	（5月頃）気象研—福岡管区担当者との打ち合わせ 第一回 （上半期4-9月） ・近年の九州の大雨に対する分析の情報共有 ・福岡管区に提供する5km長期ダウンスケーリングデータの準備 （9月頃）気象研—福岡管区担当者との打ち合わせ 第二回 （下半期10-3月） ・5km長期ダウンスケーリングデータを福岡管区に提供、両者で分析 ・既存のイベントアトリビューションデータの分析 ・成果とりまとめ